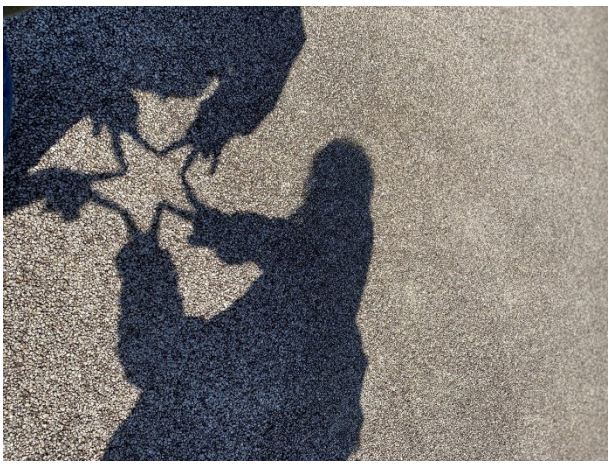
にじいろたま

Vol.31
2021年 春号

多様な性のあり方と、
幸せと人生と笑いを考える、
にじいろたまご通信！

第3回

ほんのり ALLY アライ



LGBTという言葉の広まりとともに聞かれるようになった“アライ”という言葉。理解者や支援者など、LGBTの人に寄り添い協力しようとする人たちを指します。

でも「私、アライです！」ってがっつり宣言するのも、またされるのも、何気にハードルが高いよなぁと思う今日この頃……。

そこで、「がっつりじゃなくて、ほんのりでもいいよね」というゆるめのスタンスで、アライの人が暮らしの中で感じた疑問や気になっていることを、セクマイの人と語り合ってみよう！という企画です。

今回は、大学時代に当たまごの初期メンバーとして活動後、現在は県外の島に移住し、母として子育て奮闘中のA☆さんにお話を伺いました。（インタビュアー：S＝創）

＊＊＊＊＊＊

“LGBT”との出会い

S ： A☆さんがLGBTに関心をもつようになったきっかけって、何だったんですっけ？

A☆： 昔過ぎて記憶が！！（汗） ～回想中～

大学生のときに、タイの留学生のお世話をすることになり、それがきっかけでタイに興味をもつようになりました。そこで、大学のスタディーツアー？だったかな？それに参加して、タイに一週間行ってきました。

タイで現地の学生と交流したのですが、その中にゲイの子やトランスジェンダーの子たちがいて、フツーに自分の彼氏や、身体のこと（手術したとかしないとか）などを話していたんです。LGBTの人とはじめて話したり関わったりして、こんなにオープンに話すもんなんだ！と驚いたと同時に、でも私の周りにはいないなーと思ったのがきっかけです。

日本のLGBTについても気になって、ゼミの先生にお話ししてみたところ、青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバルさんが開催する市民講座(※1)を紹介されて、参加してみたら？と。そこから、関わるようになっていきました。

S ： わ～、懐かしい！A☆さんと僕の出会いもその講座でしたね！LGBTの人とやり取りするようになって、タイとの違いとか、感じたこととかありましたか？

A☆： タイで知り合った人たちはすごいオープンで、みんな明るくて、LGBTであることが何でもないことのように感じられたのに、日本ではちょっとしたことでも「これ、聞いてもいいことなのかな？」って迷ったりしました。「ノンケ(※2)なのになんで（LGBTに関わってるの）？」「興味だけならやめてほしい」みたいなことを言われたこともありましたしねー。

S ： ああ、結構そういう話は聞きますね……今でもありそう（汗）そんな反応が返ってきてしまうのも、それまでの人生や時代の、いろいろな背景があるんですよね。

卒業論文のテーマに

S ： あの頃はLGBTなんて、メディアでもまだそんな取り上げられてなかったですよね？

A☆： 当時はほぼ取り上げられていないですねー。最近はメディアで取り上げられることが多くなって驚いています！

S ： そんな中で卒業論文でLGBT、セクシュアルマイノリティを取り上げる(※3)っていうのは、青森ではかなり先進的でした。たまごでは研究の協力をさせてもらった学生さんから許可をいただき、完成した卒論を頂戴して、希望するメンバーや学生・研究者の方にたまーに貸し出すこともあるんですが、未だに貸し出しされていますよ（笑）

A☆： いやぁ、なんともうまいこと書けていないと思うんですが（汗）でもインタビューとかしなきゃみんなの深いところはわからなかったかもしれないので、私的にはよかったです！

S ： A☆さんは前述の講座のあと、たまご初期メンバーとして活動していました。その中で交流してきたメンバーたちが、インタビュー調査に協力してくれましたね。A☆さんは一緒に楽しみながら活動していたし、たまごに馴染みまくっていたので、みんな興味本位とか思わなかったですね。単純に友達に協力する、友達とお話するっていう感覚だったと思います（笑）

A☆： そのときのインタビューがきっかけで、我が子の名前はどちらでも大丈夫な名前にしたんです。

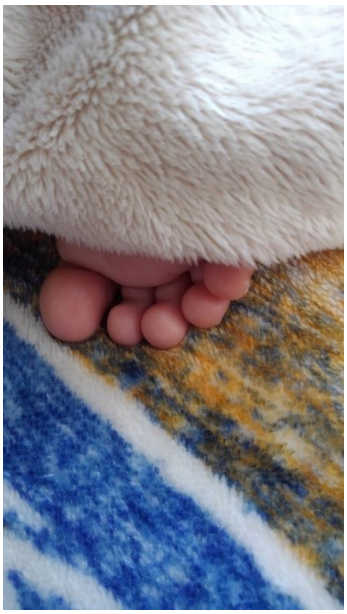
S ： お、その辺も少し聞かせてください！

子どもが生まれて……

S ： お子さんの名前を決めるときに、どっちでもいいように～っておっしゃっていましたが、それは、例えば自分の子どもがLGBTだったら、って考えて？

A☆： 卒論のインタビューのときに、「自分の女の子らしい名前が嫌いだった」っていうのを聞いて、その言葉がずーっと引っかかっていたんですよね。だから、そのときから決めていたんです。どっちでも大丈夫な名前にするって！

S ： なるほど、そういうことでしたか！他に、お子さんが生まれて改めて思うことや感じていることはありますか？



A☆： やっぱり生まれたばかりだと、男の子、女の子っていう身体の特徴でがっつり区分けされるんですよね。今は子どもがまだ1歳なので、本人のジェンダーについてはそんなに考えていないんですけど、こっちは小学校から制服なので……スカート嫌な子とかは大変だろうな、って思います。

S ： たしかになぁ。一人ひとりの性を大切にするためには、教育の中で性の多様性にも触れてもらえたらいいなって思うけれど、制服っていう制度ひとつとっても多様性が尊重されづらいのが現状なんだなって感じます。もちろん、制服のメリット・私服のデメリットもあるから、一概に制服やめたらいいっていう話でもないけど。

A☆： 子どもへの教育って難しそうだなーって思っています。LGBTも含めて、性に関することって。自分の子どもには、性別にとらわれることなく、一人の人として相手と仲良くしてほしいですけどねー。

未来への願い

S ： A☆さんが卒論を書いた頃とは、だいぶLGBTに対する認識が変わってきたところもあるのかなーと思うんですが、実際のところ社会が変わったか、っていうと、まだまだスタート地点なのかなとも思ったりします。

これから子どもたちが生きていく社会が、どんなものになっていったらいいと思いますか？

A☆： どんな社会……。

島って、二人くらい友人を辿ると知り合いというか、島全体が大体みんな知り合いなんですよね。そこにぽつんと移住してきたから、マイノリティ的な立場なんですが（笑）そこで改めて感じていることなんですけど……。

どんな人でも自分らしく生きていけて、それを受け入れてくれる人がいる社会になってほしいです。たとえ人数が少なかったとしても、自分を受け入れてくれるとか、自分と仲良くなりたいと思ってくれる人がいるって、本当に心強いので！

＊＊＊＊＊＊

A☆さんは、アライという言葉が広まるずっと以前から、友人として他の人たちと何ら変わりなくセクマイの人たちと接していました。

LGBT関連のニュースが増えて、社会の理解が進んできたと言われる反面、「社会」というとどこか他人事のようで、自分とは関係がないと思われることも実際には多々あります。

しかしA☆さんの最後のコメントには、今そこにいる自分、今そこにいる誰かが、ありのままで大切にされてほしいという願いが込められていました。そしてそれは、人と人との一対一の関係の中からでも叶えていくことができると気づかせてくれました。

もしかしたら、その一対一の関係……一番小さな「社会」こそが、私たち人間にとって、一番の生きる力になるのかもしれません。

（創）

《注釈》

※1…青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバル実行委員会が2008年10月25日に開催した、市民のためのLGBT基礎講座「日本のLGBTの状況～経験と実践から～」

※2…異性愛者のこと。その気（ケ）がない、から生まれた言葉とされる。当事者が使うことが多く、公にはあまり使われない。

※3…地方におけるLGBT当事者と、活動団体やコミュニティについて考察したもの。

弘前市職員さんに聞く！

性的マイノリティについての取り組みと、市が目指す“まちづくり”

2020年12月10日、青森県弘前市では東北地方で初めて、「パートナーシップ宣誓制度」を開始しました。

…とはいうものの、今なお誤解や偏見がなくならない現実社会を生きる身としては、「ホントに？ホントに否定しない？あちこちに広められたりしない？」「そもそもなんでこんな取り組みすることになったの？」と、すぐには信じられない気持ちにもなるもの（※個人の感想です）。

そこで今回にじたま編集部では、弘前市の性的マイノリティに関する政策を担当している企画課の職員さんに、ざっくばらんにいろいろ聞いちゃおう！という企画を立ち上げました。

どんな人たちが、どんな思いでこの政策に取り組んでいるのか。ちょっと気になりませんか？

＊＊＊＊＊＊

取材日：2021年2月10日

インタビュアー：創・あき・あずき、企画課担当者さん：担

取り組みの始まり～性別欄の削除や配慮

創　：　そもそも、性的マイノリティに関する取り組みが始まったきっかけって何だったんでしょう？

担　：　弘前市男女共同参画プラン2018～2022というのが平成30年11月に策定されているんですが、その中で初めて性的マイノリティの方に対する環境整備ということが記述されたんですよね。

平成31年度（令和元年度）からは、男女共同参画業務を企画課が担当することになり、今後何をやっていくかを考え、他の自治体の取組も参考に性別欄の見直しを行うことにしました。市で作っている文書の様式から基本的に性別欄をなくす、必要な場合も可能な限り「男・女」の二択ではなくて、「その他」の選択肢を増やすとか、空欄で自由記述にするとか、そういった市の全庁的な方針を示しました。それが一番初めの取組になります。

創　：　具体的には、どのような動きになったんでしょうか？

担　：　全部署に照会をかけて、市で定めている様式で性別欄があるものを挙げてもらったところ約200様式あったんですが、そのうち約80の様式は性別欄を廃止して、約20の様式は配慮して記載…二択ではなくするとか、自由記述にするといった方向になりました。その際、様式が条例で決められているものは、性別欄削除のために条例を変えなければならず、議会での審議が必要になるものが印鑑証明書ひとつだけありました。その年の9月に議会で審議され条例改正し、それ以外に規則改正が必要なものも約20様式あったんですが、それらも企画課でとりまとめて令和元年度中に改正しました。

市としての基本的な方針は示しているので、その後新しくできる様式とか、当初変更できないといったものでも各課で随時直せるものは直していくような形です。その方針がまだ浸透し切れていないところもあるかと思うんですけど、そういう中でも、他課の職員から書類の性別欄の必要性を尋ねられることもあったりして。意識っていうところでは、だんだん職員の中に根付いてきているのかなと思ったりすることもあります。

あき　：　気づいて職員さん同士で言えるって、すごいって思いました。なかなか言えないですよ。よく言った！（笑）

職員研修と市民向けセミナー

創　：　条例改正をして（令和元年）11月に印鑑証明書の性別欄が削除されましたが、同月に職員研修もされたんですよね。

担　：　弘前大学の山下梓先生にお願いして、新任の課長補佐級、係長級を対象とした研修の一環として行いました。前半は先生のお話で、後半は職員同士でグループになって、自分たちにできることは、という感じで話し合ったんですけど、予想以上にどのグループも活発に話し合っていたんですよね。

令和元年度の職員研修の様子　※新型コロナ流行以前です

創　：　そういえばテレビのニュースでちょっと拝見したんですけど、インタビューを受けていた職員さんが、「これはちゃんと取り組まなきゃいけないことだと思った」みたいなことをお話してくれていたんですが、すごく気持ちがこもっている印象を受けたんですよね。

ところで、新任の課長補佐級と係長級が対象ということだったんですけど、そこに絞った理由があるんでしょうか。

担 ： まずはそれぞれの施策をとりまとめる立場の職員にと考えました。その上に部長、課長もいるんですけど、まずは実際にひとつひとつの対応に動いている人たちから始めました。

創 ： 若い職員から疑問が出てきたときに、そういった立場の人たちが説明できれば、対応も早くなるし全体が変わっていきますよね。今後も是非続けてほしいです。それから、市民向けのセミナーですね。

担 ： 令和元年度は前述の山下先生にお願いして、「私の『ふつう』はだれの『ふつう』？性の多様性と人権」というタイトルでお話いただきました。平日の夕方にも関わらず50名近くの参加があって、10代から70代までとても幅広い年代の方にお越しいただきました。講演が終わったあとも、講師の先生のところにお話を聞きにいく人もいたんですよ。

先日は「誰もが安全・安心に暮らせるまちづくりについて－レインボーファミリーの視点から－」と題して、令和2年度のセミナーも開催しました。ただ新型コロナの影響もあって、昨年よりは参加人数が少なくて…でも結果30人を超える方に参加いただき、質問などもいろいろ出て、私もとても勉強になりました。こうした場の存在が大切だと感じています。

令和２年度　ひとにやさしい社会推進セミナー

誰もが安全・安心に暮らせる
まちづくりについて

－レインボーファミリーの視点から－

弘前市でもパートナーシップ宣誓制度がスタートしました。制度の対象となる性的マイノリティの人たちのカップルや家族（レインボーファミリー）の視点から、誰もが安全に安心して暮らせるまちづくりについて考えます。

日　時　1月27日（水）　午後6時～7時30分
場　所　弘前市民文化交流館ホール（ヒロロ4階）
講　師　山下　梓さん（弘前大学男女共同参画推進室助教）
定　員　45名（先着順、参加無料）

お申し込み方法
1月25日（月）までに電話またはEメールでお名前・電話番号をお知らせください。
※託児（未就学児）をご希望の方は、1月19日（火）までご連絡ください。

お申込み・お問い合わせ
弘前市企画部企画課
電話：0172－26－6349／E-mail：kikaku@city.hirosaki.lg.jp

◇ 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、マスクの着用、入場時の検温、手指の消毒にご理解とご協力をお願いいたします。
◇ 発熱や風邪の症状がある方、体調が優れない方などは、参加をお控えください。
◇ 新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、中止又は延期となる場合があります。あらかじめご了承ください。

令和2年度の市民向けセミナーのチラシ

創 ： 市の主催するセミナーでこのテーマが取り上げられることで、安心できることもあると思うんですよね。いわゆる当事者だけじゃなくて、親御さんとか、兄弟とか、友達とか…正しい情報を知らないがために不安になることがたくさんあると思うんです。市が発信を続けてくれることで、誰かの生きる勇気に繋がることってあるんじゃないかな。

そしていよいよパートナーシップ宣誓制度ですね。ぶっちゃけね、マジか！って思いました、最初聞いたとき（笑）

あき ： ね、びっくりしました（笑）

創 ： びっくりしたよね（笑）印鑑証明のときは驚いたと言っても、弘前やるんだ、うんうんいいね、って感じだったんですけど。

あき ： そこからこう…こうでしたよね（笑）←手で、跳ね上がるような仕草

創 ： そうそう、なんか、ハードルがすごい上がるというか。ふぇ～～～、新しい制度作っちゃうんだ？！って（笑）

担 ： 思いました、私も（笑）

令和2年度の市民向けセミナーの様子

パートナーシップ宣誓制度、導入へ

創 ： きっかけを改めて教えていただけますか？

担 ： 性的マイノリティに対する取組を進めていく中で、当事者の方とお話しする機会があったのですが、その中で市にできること、望むことを伺うと「パートナーシップ制度を導入してほしい」という意見がありました。他の自治体での取組も知っていましたが、市としても気運の高まりを待って、という風に答えていました。制度の必要性も議論していましたが、職員研修の際に講師の先生が、まず制度を導入することで広く知ってもらうきっかけになるということが大きいと思う、というお話をされていて、「たしかに」と思いました。

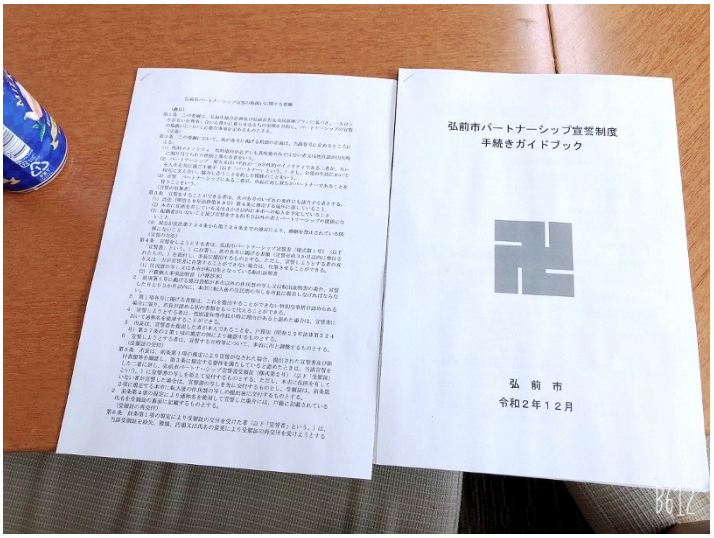
令和元年度は様式の性別欄見直し、職員研修、市民セミナーとやってきて、令和2年度の具体的な取組について課内で話し合いをする中で、これまでの取組は引き続きやっていくけれど、さらにできることはないか、という感じで。制度を作ることに意味があるんじゃないかという話をしていました。そんな中、令和2年度の予算を審議する議会で「制度についてどう考えているか」という質問があって「前向きに検討していきます」というお答えをしました。

令和2年度になって、他の自治体の取組や法律制度のことなどいろいろと調べ、「これはやるべきだ」という市長のお考えもあって、具体的な検討が進んでいきました。制度の案を作って男女共同参画の審議会に出したときは委員の皆さんとても驚いた様子で、会議の会場から「うぉぉ～、パートナー制度ですか！？」というお声もありました（笑）基本的な考え方やスケジュールなども具体的にお話しし、全会一致で「ぜひ進めてください」というご意見をいただきました。

創 ： ですよね（笑）びっくりするよね。びっくりしたよ、当事者でもびっくりした（笑）

担 ： 東北では初めてということなんですが、委員の方が、逆

に東北初っていうのがおかしいと思う、ともおっしゃっていて。なんで逆にみなさんやっていないんですか？という話が出たりもしました。



ガイドブックや要綱は市のホームページからも見られます

まず制度を導入して知ってもらうことから、ということでスピード感を重視し「要綱」として制度を作る形になりました。「条例」や「規則」にするともっといろんなことができるようになるんですが…。

例えば、市営住宅の入居要件は条例で定められているために、今回（パートナーシップ宣誓制度の）「要綱」を作ったからといって、その上に位置する「条例」の一部を変えることはできなくて。しかも市営住宅の条例だけの問題ではなく、他の条例でも例えば夫婦だったり親子関係だったりを示す言葉が使われているので、それら全てに対して波及させるのでなければ整合性がとれない。そうなると相当の時間と準備が必要で、今回は市営住宅の入居要件を変えることはできなかったんです。でもいずれは…と思っています。

制度はまだこれからの段階

担 ： 市でできることが限られてしまって、まだあまりメリットを感じないかなと思うんですが、民間の事業者さんにもこれから周知していって、できることを一緒に増やしていけたらなと。そうしてメリットが増えれば、利用したい人も増えてくれるのかなと考えています。

あずき ： すごく個人的には、あんまり話題になってこう、ガヤガヤされるのもちょっと…次の日職場で話題になってたらどうしよう、とか、隠してるのに、っていう気持ちもあって。広く知ってほしいっていう気持ちとの、ジレンマが…。

創 ： あるある。実際地元で暮らしていると、性的マイノリティはおかしいって声や態度に出す人はいても、そんな偏見がまかり通る世の中の方がおかしいって声に出してくれる人には、なかなか会えないから…だからずっと隠して生きてきたし。やっぱり不安なんだよね。

担 ： セミナーに来てもらったり、直接お話はできなくても、制度を通して、そういった方たちにも、今ある偏見をなくしていこうという市の姿勢というか、メッセージが伝わればいいな、と思っているところもあるかもしれません。導入が12/10、世界人権デーっていうのもポイントなんです（笑）

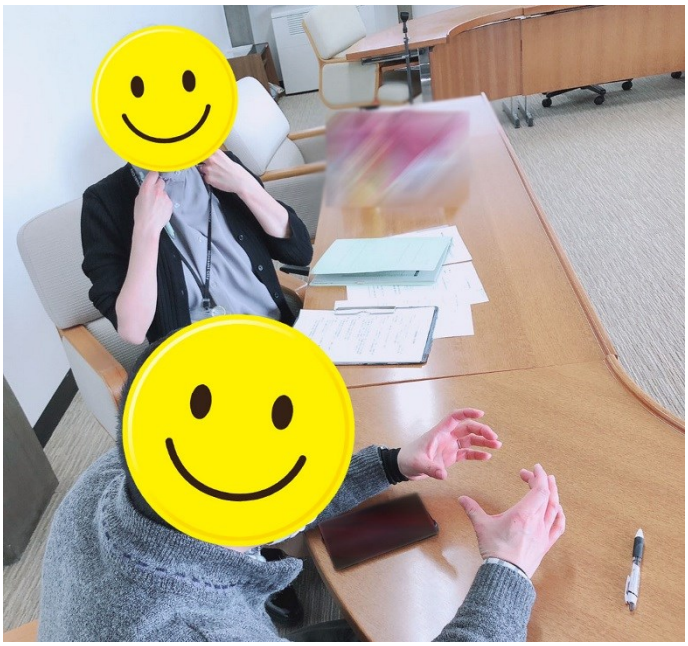
創 ： 人権って言葉にするとかたく考えがちなんですけど、本当はもっと単純というか、当たり前のことなんですよね、きっと。あなたもわたしも大切にされていいんだ、っていう。

あずき ： そういえば、今は双方が弘前市民っていうところに限定していますよね。私の周りだと、二人とも弘前市民っていうカップルは多くない感じがしているんですが、今後、市内の企業に勤めている人とか、対象を広げていくのかな、どうなのかな、というのも気になっています。

担 ： 当事者の方たちとの意見交換でも、弘前に通勤通学している人も対象にしてほしいっていう意見もあったんですけど、いろいろ議論していった結果、市の要綱として定めるので、条件として市に住んでいる市民を対象にするというところで最終的にまとまりました。

でも今は弘前でも、例えば婚活なんかも圏域という考え方で近隣の市町村と一緒にやったりしているので、パートナーシップ制度についてもそういう考えはあります。まだ近隣の市町村にはこちらから働きかけできていないんですけど、やるという市町村が出てくればそこはぜひお願いしていきたいと思っています。

既に制度を導入しているような自治体とは、自治体ごとに若干条件が違っていたりすることもあって、協定を結ぶようなところまでは現段階では考えていないんですが、他市町村から弘前市に転入する時に、以前パートナーシップ宣誓をしていたというのを何かしら、申し送りというか、そういうことができないかなとは考えたりしています。


インタビューは市役所内の個室にて

あずき ： 他の自治体ではやっているところもありますよね。そういうのができたら、移住のきっかけとかにもなりそうですよね。

創 ： 移住してもらって人口が増えたらいいよね（笑）反対派の人は当事者が増えるんじゃないかって思ったりするみたいだけど、性的マイノリティって「なる」ものじゃないし、ただの人間なんだよなぁ。実際、働いたり、消費したり、税金納めたりし

て暮らしている一市民だよね。

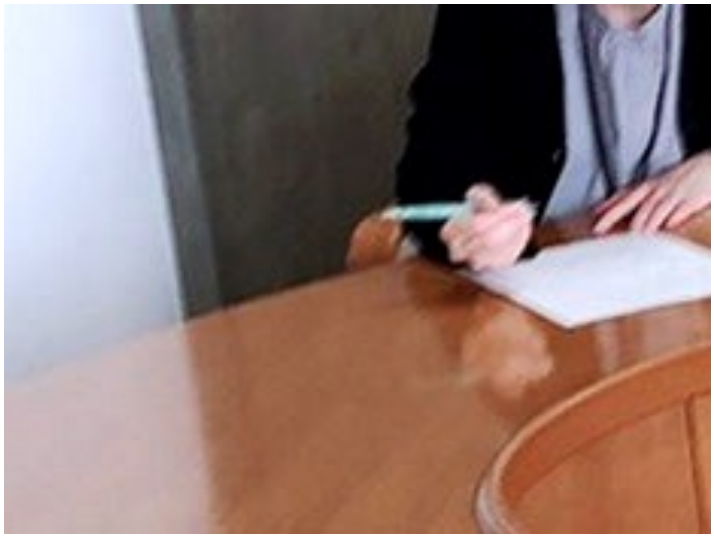
担 ： 同じ企画課に人口減少対策の係もあって、それこそ移住とか担当しているんですけど、いろんな理由で移住してくる人はいるし、制度があるだけでも違うと思う、っていう話をしていて。移住を希望する人にとって、制度がきっかけになったらいいなというのも、ちょっと思っています。

知ることから変わっていく

創 ： 制度を通して知ってもらうことから、というお話でしたが、担当さんご自身は性的マイノリティについて知ったことで、何か変わったことはありましたか？

担 ： 私自身、担当になるまでは、「性的マイノリティの人たち、全然いいと思う、否定しません」とは思っていても、そこから先を知ろうとしていなかったというか…実際にはすごく困ることがあったり、もう人権のレベルでおかしな話だったりするのに、そこまで気づけていなかったんです。

そういう感じの人って、実はすごく多いんじゃないかと思うんですよ。なので制度を通じて知ってもらうことで、気づいてもらえること、変えていけるものもあるんじゃないかって。



この後の制度体験でも、気がついたことをメモしていた担当者さん

創 ： 市が取り組んでいることで、子どもたちにも知ってもらえる機会になるかもと思っているんですが、それも大きなことですよね。

性に限らず、みんなと違うところがあるっていうのは孤独で、苦しいことだったりもする。知らず知らずのうちに劣等感を持ってる子もいるかもしれない。でもいろんな人がいるんだ、認めてくれる人たちがいるんだっていうのが見えれば、また変わってくるのかなって。

担 ： うちの子今中学生なんですけど、学校で3回くらい制度の話出たよ、って話をしてて、あ、ホント？！って（笑）意外と知ってる？いやまぁ新聞とかに載ってるからな、とか思いながらも（笑）

それこそ、性的マイノリティだからみんな同じっていうことじゃなくて、人それぞれ違うとは思うんですけど、知らないのと、知ってるのとは、全然違いますよね。

創 ： 知るの意味合いがきっと、単なる知識っていうことじゃなくて、心のところまで何か落ちてくるものがあることで、気持ちの中に残るっていうのもあるんでしょうね。

市が目指すもの

担 ： この前のセミナーで講師の先生も言ってたんですけど、LGBTっていう言葉で言われると、その人はLGBTだけで構成されている、みたいな考えになっちゃうことがあるって。もっといろいろ、どこどこ高校出身の、とか、血液型は何型の、とか、（性に関することは）その人の全てじゃなくて、その人を構成するたくさんのものの中のひとつだっていう。

創 ： めっちゃわかります。前はいっしょくたに「変なもの」みたいな感じだったけど、今はLGBTっていう言葉だけが先に広まっちゃって、LGBTの人！って思われちゃう。

あずき ： 当事者もそういう風に振る舞わなきゃいけない、みたいな。

創 ： そうそう、LGBTの人にならなきゃいけない、みたいな。

あき ： でも専門知識とかはなんも知らない、みたいな（笑）

創 ： たまたま当事者だってだけだもんね（笑）一言で当事者って言ってもみんな違うし。

あき ： 自分のこと以外だと全然わかんないですよね（笑）他の当事者の話聞いて「あ、そうなんだ～」とか（笑）

創 ： 最後の質問を。こうした取組を通して、最終的に市が目指すものって、どういうところでしょうか。

担 ： 市の男女共同参画プランの基本理念として、「一人ひとりが互いを尊重し合い　心豊かに暮らせるまち弘前」というのがあるんですけど、そこに繋がっていくと考えています。まちづくりの一環ですよね。

困難な状況におかれている人への理解と共感が広がり、みんなでその困難をなくしていく。多様性を尊重するまちづくりが、より一層推進されるよう努めていきたいです。

＊＊＊＊＊

性的マイノリティに関する取組は、まちづくりの一環。それは性的マイノリティに限らず、少数者である人も、市民のひとりとしてこのまちで生きているということを、しっかりと受け止めているからこその言葉だと感じました。

一人ひとりがお互いの違いを認め、尊重し合うということは、とてもシンプルだけれど、意識しなければ気がつけないことも多々あるように思います。だからこそ、理想を持ち続けること、掲げた理念に向けて試行錯誤を繰り返していくことが、大切なのかもしれません。

私たちはみんな何かしらの違いがあるけれど、みんな同じ人間、対等な命をもって生まれてきました。誰もが大切にされる、あたたかい未来を紡いでいきたいですね。　（創）

☆弘前市パートナーシップ宣誓制度に関するwebページ

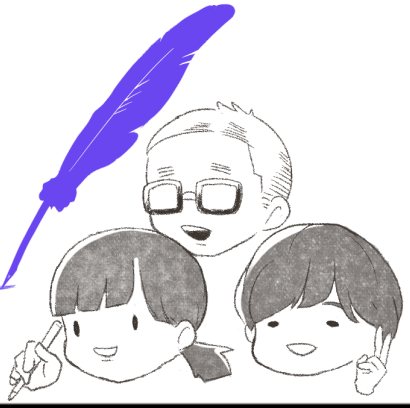
http://www.city.hirosaki.aomori.jp/jouhou/seido/202012041210.html

作：あき

スクランブルエッグ突撃体験レポート

たまレポ

レポート1、弘前市パートナーシップ宣誓体験してきたよ。



③いざ、宣誓!!

2人で宣誓書に記入しましょう。裏面には要件のチェックもあるよ。

チェック入らなかったらどうなるんだろ…？

同時進行で担当者さんが書類のチェックをします↓

あのー宣誓に通称名は…

使えます

優しい!!

通称名の使用がわかるものをご用意ください

ちなみにLOLOではカードの即日発行はできません 市役所でも発行に1時間程かかるので即日発行希望の場合は事前に確認してくださいね

LOLO

④受領証交付!

コロナで屋外から来れない時は…

とにかく相談ですねー

弘前市パートナーシップ宣誓書受領証

弘前太郎様 弘前次郎様

パートナーシップを証明しますよ〜

第号 年月日

カードっていいな…

受領証の交付は市役所に来ていただくか、郵送もできます

受けとりは、土日でも…？一人でも…？

大丈夫です

優しい!!

まる。

体験を終えて…

正直、まだカードが活躍する場面が少なくて…

制度の効力は今後に期待！ですね！

実はうちの会社パートナーシップがあれば福利厚生に使えるんです

えっ!!? すごい!!

今まで関係ないと思ってたことが、パートナーシップのおかげで自分のこととして考えるようになりました

Tさん、宣誓体験ありがとうございました！

当事者の事情を考えて、様々に対応できるように配慮されているなーと思いました！

誰もが生きやすい多様な社会を作っていくきっかけになる制度でしたね！

以上、たまレポでした!!

制度の詳細は、弘前市のホームページで調べてね!!

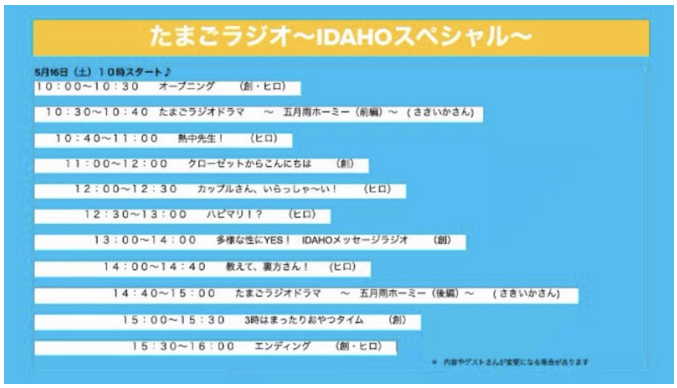
2020年度活動報告

【多様な性にYES！たまごラジオ～IDAHOスペシャル～】

IDAHOとは、「LGBT嫌悪に反対する国際デー（International Day Against Homophobia, Transphobia and Biphobia）」として国際的に知られている記念日です。WHO（世界保健機関）において、同性愛が精神疾患とされなくなった5月17日が国際的な記念日となりました。

日本でも、この日に合わせて全国各地で街頭でのメッセージ読み上げやパレードなどのアクションが行われています。スクランブルエッグではIDAHOメッセージ展を映画祭に合わせて毎年行ってきましたが、昨年はコロナウィルスの影響で映画祭も中止、メッセージ展も中止となりました。

それでも何かしたい…ということで、思いついたのが、ラジオ！！メッセージの読み上げもできる、顔出しなしでできる、しかもゲストを招いて話したかった人と話せる、ということで一石三鳥の企画でした。



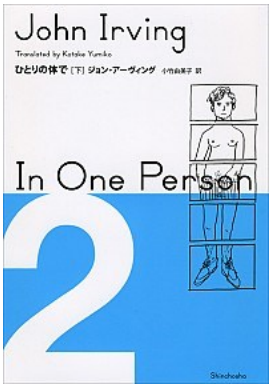
5月16日にツイキャスを使って、創さんと私ヒロの２人でパーソナリティを交代しつつ、番組・ゲストを変えながら、なんと６時間の生放送！　クローゼットさんや、当事者さん、アライさん、当事者の兄弟まで巻き込んで、多様な一日となりました。長丁場でしたがたくさんの方にご出演いただき、また多くの方にお聞きいただきましたこと、皆様に改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。いや本当に楽しかった！　特に自分の作品をラジオドラマとして放送できたのは大変良き思い出です。読み手さん、音楽担当のアヤノさんありがとう。またやりたいな。

昨年度はこの他の活動も含め、全てオンラインでの活動。リアルで会う活動は全休止となりました。未だコロナの影響は収拾の目処も立たず、今年度もこれまで通りとはいかないでしょう。それでも、活動の意味があると感じる限りは（本当は社会が変わり、活動しなくても良くなるのが目標ですが…）、自分たちにできることを、無理なく、楽しく、続けていきたいと思います。今年は何かできるかな。何ができるかな。ワクワクしたいですね。皆様も、まずは健康第一で！！　（ヒロ）

SMASH HIT! スマッシュヒット！

たまごメンバーが個人的にオススメする本、映画、ドラマなどの情報

『ひとりの体で』（上・下）
著：ジョン・アーヴィング／ 訳：小竹由美子／ 新潮社



老作家ビリーは小さな田舎町で過ごした少年時代を回想する。魅力的な図書館司書にも同性のレスリング選手にも惹かれる彼は、やがて激動の80年代を“ひとりの体”で歩んでいく。巧みなストーリーテリングを彩る登場人物は少年から老人に至るまで自らの性に揺れており、その誰もが愛情を持って描かれています。

上下巻で綴られる物語を読み終えたとき、わたしたちが自分の性を語るにはこれほどの熱量が必要なのだと思い知らされます。

大人向けの作品ですが、ティーンにも読んでもらいたい一作です。ステイホームのお供にじっくりお読みください。

（あずき）

2020年度は左記のネットラジオの他に、Zoomなどのオンライン会議用ツールを使っての講師派遣や座談会、録画した映像によるオンデマンドでの講義、オンラインのアンケートやインタビューによる研究への協力を何度か行いました。リアルで集まれない反面、遠方での講演や交流も可能になるなど、オンラインのメリットもありました。

一方で、交流会はオンラインで一度企画したものの参加がなかったりと、まだまだ手探りでのwithコロナです。

今回より正式にオンライン発行に切り替わった『にじたま』。活動が制限される中、記事の執筆や編集もこれまでのようにできないところもありますが、今後もできる範囲で続けていきたいと思います！　（創）

発行元：スクランブルエッグ
ＵＲＬ：http://gochamazetamago.main.jp/
メール：gochamazetamago@yahoo.co.jp

☆最新情報はこちらでチェック→ @gochamazetamago